

「舟地藏」(文化財指定のための推薦文)

大庭城址のふもと、大庭橋の北側に石舟の台座に乗った「舟地藏」が祀られている。「舟地藏」の名称は最寄りの交差点や公園、バス停にも用いられており、大庭のランドマーク的存在となっている。

かつては引地川岸に近い個人の敷地に祀られていたが、昭和42年に始まった西部開発事業による区画整理のため再々移転を余儀なくされた。長年にわたって舟地藏公園入口付近に仮置きされていたが、開発事業終了後の昭和61年12月に、表郷町内の有志18名が共同名義で購入した現在地に安置した。平成29年に表郷町内会が認可地縁団体の認可を受け、翌30年に土地の所有権が当町内会に移管された。表郷町内会では年に4回ほど植栽の手入れや清掃など、管理保護を行なっている。

「舟地藏」は丸彫りで、舟の舳先を向いて坐した珍しい形である。造立年は不明だが、舟の台石に乗った地藏が建立されるようになったのは、栃木県岩船山高勝寺の「岩船地藏尊」が流行神として広まった享保4年(1719)以降であるといわれる。したがって大庭の「舟地藏」も、それ以降の造立と考えられる。なお、台谷戸の路傍にも「南阿弥陀仏」と刻まれた舟形の石に横向きに坐した地藏像があり、こちらは嘉永6年(1863)の銘がある。

「舟地藏」が江戸時代中期以降に建立されたことは明らかなのだが、その由来ははるか時代を遡って次のように伝えられている。

北条早雲が大庭城を攻めていた頃、大庭城の周囲は一面の沼地であった。北条方の軍勢は、沼地に阻まれてなかなか城を攻め落とすことができなかった。ある日、引地川対岸の稻荷で団子を買っていた茶店の老婆が、「堰を切ってしまうと水は干上がる」と、うっかり北条方の兵士に話してしまった。北条軍は、堰を切って大庭城を落とすことができたが、秘密が漏れることをおそれて、老婆の首を切ってしまった。「舟地藏」は、老婆の死を悼んだ土地の人たちが建てたものだという。

このほか、落城の際に城から舟で逃げる際に亡くなった女性を供養するために、舟に乗った地藏を建てたとする伝承もある。また、このあたりでたびたび大水が出るので、老婆や戦いで亡くなった人の祟りではないかという事になり、当時の名主が供養のために建立したとも伝えられている。

舟に乗る地藏像は、彼岸の浄土に行こうとする衆生を地藏菩薩が「願船」に乗せて運ぶという信仰から造形されたものであるが、その形状からおのずと洪水や大雨、航行の安全など水による災難を除けることを願って祀られるようになった。大庭の「舟地藏」も、引地川周辺の治水を祈願して建てたというのがほんとうのところであろう。

「舟地藏」にまつわる話は、いわゆる落城伝説のひとつで、同様の伝承は全国各地に分布する。その多くは中世以降の山城を舞台に、その土地所縁の合戦や武将と結び付けて悲劇的な結末を語るものであるが、あくまでも口碑伝承であって史実ではない。しかし、「舟地藏」の由来譚は、大庭城が川に囲まれていたこと、引地川の水運が活発であったことなどを示唆する貴重な「景観伝承」となっている。また、開発によって景観のみならず人々のライフスタイルも大きく変貌した現在において、「舟地藏」を核とした口碑が伝承され続けていることも、稀有であるといえよう。

こうした観点から、大庭城址周辺および引地川のかつての景観を物語るモニュメント(史跡)として、「舟地藏」を保護していく必要があると考える。